

季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

（第四七三号）

処暑 しよしよ

八月二十三日

愛子さま、川曳に

立秋から半月が過ぎ、「処暑」に。「処」は収まるという意味がありますが、残暑は続いています。

太陽はいつもまんまる秋暑し 三橋俊雄

八月二日、天皇、皇后両陛下のご長女、愛子さまがお木曳行事の視察に伊勢へお越しになりました。神宮式年遷宮のご造営に用いるヒノキ材を伊勢市民たちが内宮へ曳き込む「川曳」はこの日が最終日。愛子さまは、五十鈴川の右岸に設けられた特別席から、川曳の様子をご覧になりました。ほら貝が鳴らされ、木遣り子が采を振りながら唄う姿に、拍手を送られました。

そのあと、内宮の参道に移動され、白い半被を着用し、大湊奉曳団に合流。ご用材が載せられた木のソリから伸びる白い綱を両手で持たれ、団員とともに曳かれました。

「感無量です」とは大奉曳団を率いた強力修団長。愛子さまがしっかりと足を踏ん張って曳かれる姿に、団員たちは大喜びでした。間近で拝見した人々も口々に「感激しました」と、撮影した写真などを見せ合っていました。私も曳き終えた後、愛子さまが関係者に挨拶をしていらっしゃるのを拝見。愛子さまがいらっしゃるとその場がぱっと明るくなります。皇居に戻られたら、天皇、皇后両陛下にお木曳の様子をご報告なさったことでしょう。私も大湊奉曳団として、同じ綱を握らせていただいたこと、一生の思い出となりました。

五月から始まった第一次「令和のお木曳」も、これで無事に終了しました。来年の第二次に向けて、また準備が始まります。

文 千種清美



おかげの里便り

おかげ横丁

○ 第32回 来る福招き猫まつり

9月29日は、「来る福（くるふく）」と縁起よく読めることから、「招き猫の日」とされています。

年に一度、私たちのために日々、福を招き続けてくれる招き猫たちに感謝するとともに、招き猫たちとの出会いをつなぐ記念行事が「来る福招き猫まつり」です。

32回目を迎える今年のテーマは、「お木曳の伊勢にて 福を招く」。

式年遷宮を迎える伊勢では令和8年から9年まで、神宮へ御用材を運ぶ「お木曳」の行事が行われています。そんな節目の年に、全国から招き猫たちが伊勢に集結。

招き猫作家による個性豊かな作品との出会いや、ここでしか手に入らない限定商品、作家による実演や体験など、招き猫の魅力を存分に楽しめる催しを開催します。

福を招く招き猫たちに出会いに、ぜひおかげ横丁へお越しください。

日 時／9月19日(土)～9月29日(火) 9:29～17:29 (催しにより異なる)

会 場／おかげ横丁一帯

※天候等により内容を変更する場合があります。

● お木曳行事記念企画 木曾ヒノキに触れる

長野県上松町の木曾ヒノキを使用。伊勢の伝統行事、お木曳を記念して箸づくりを開催します。

場 所／伊勢路栽苑

料 金／1,000円 (税込)

- ・カンナ削り体験：本格的な道具を使ったのもづくり
- ・削り華の香り袋：端材を「香りの守り」としてお持ち帰り
- ・来る福招き猫まつりオリジナルデザイン箸袋

お問い合わせ／おかげ横丁総合案内「おみやげや」 電話0596-23-8838

五十鈴塾

○ 処暑～風鎮め～

今年は台風が多いとか、暮らしや農作物に大被害をあたえる台風は日本では恒例の災難、二百十日

(9月1日)は雑節の一つになっているほど。二百二十日、旧暦の八朔と合わせて三大厄日とされました。この厄災を逃れるために風鎮めの行事が行われ、今でも残っています。奈良大和神社の風鎮

祭、富山市のおはら風の盆など。風の盆は豊作を祈願し、祖先に感謝を捧げるもので3日間続きます。旧暦の八朔は田の実(米)の節句といわれ、田の実は「頼み」につながり早稲や初穂を神前や世話

になった人に捧げ、台風の被害を免れるよう願う行事の意味もありました。

古い風習ですが、鎌は風の力を衰えさせるとして軒先に吊るしたり、屋根の上に竹を立て、先端に鎌を結び付けたりしたそうです。

五十鈴茶屋

○ 五十鈴茶屋節気菓子

の 野 ぎく 菊 牡伊勢路をわたる風にも季節の移ろいが感じられ、数多くの野菊が愛らしい花を咲かせる頃となりました。練りきりで粒あんを包み、初秋の野に揺れる、小さな花に見立てました。

ふじ 藤 ばかま 袴 夏の終わりに秋の初めに花を咲かせる藤袴。香水蘭とも呼ばれ、秋の七草のひとつです。この時季にふさわしい花そのままを、葛生地と緑鉛で彩りました。

つゆ 露 たま 玉 草木の緑はなお深みを見せているものの、葉に滴る露のひと雫からは秋の気配が感じられます。秋の季語「露の玉」を羊羹のきんとんと、こし餡で表現しました。